

氏 名	李 東芹
学 位 の 種 類	博士（美術）
学 位 記 番 号	第 130 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	東アジアの十王信仰及び六道思想に関する図像研究 -千本引接寺（ゑんま堂）蔵「十王地獄図」の復元を中心に-
審 査 委 員	主査 教授 宇野 茂男 教授 竹浪 遠 准教授 高林 弘実 教授 渡辺 信明 客員研究員 加須屋 誠

## 論 文 の 要 旨

本研究は、京都千本引接寺（ゑんま堂）蔵「十王地獄図」板絵について、東アジアの十王信仰と六道思想についての研究を整理し、光学調査・科学分析等の現地調査を実施するとともに、関連作品及び文献資料の考察を通じて想定復元模写を制作することにより、その思想背景や宗教美術作品としての意義を明らかにすることを目的とする。

ゑんま堂は、京都市上京区閻魔前町にある。平安初期に小野篁が建立した祠が始まりと伝えられ、寛仁元年(1017)に源信の門弟・定覚上人が、「諸人化導引接仏道」の道場として「光明山歓喜院引接寺」の名で開山した。「十王地獄図」は、狩野元信筆と伝えられ、実際の筆者は不詳であるものの制作時期は室町～桃山時代（16 世紀）と考えられる。内陣 2 面、外陣 4 面からなり、外陣の 4 面板絵の寸法は縦 210cm×横 210cm、内陣の 2 面の寸法は縦 210cm×横 153.5cm の大画面を構成し、現存する地獄板絵としては日本最大とされる。外陣の各面は、経年劣化、剥落、汚損が進んでおり、特に下部の図様の損傷が激しい。一方、内陣の 2 面は、本堂内の司命・司禄彫像の後ろに設置されていることもあって、保存状態が外陣よりも良好で、目視観察によっても図様が概ね把握できる。

本論文は、五章から構成される。〈第一章 千本引接寺（ゑんま堂）蔵「十王地獄図」について〉では、本図の概要や文献記録を紹介するとともに、本作の図様の成立背景である、十王地獄図の展開についても紹介する。地獄思想はインドに誕生し、中国で十王信仰が晩唐までには成立し、続く宋代には広く流布した。中国に留まらず、周辺地域にも影響を及ぼしており、朝鮮半島では甘露幀（人

間の苦を救い、極楽往生を主題とする施餓鬼法会図)の流行を見た。日本でも特に平安時代には末法思想の広がりとともに地獄の信仰が高まり、鎌倉時代以降、中国の図像も取り入れた十王地獄図が盛んに制作されるようになった。本図は民間にも信仰の広がった室町以降の作例である。

〈第二章 「十王地獄図」の図様検討及び場面の文献的考察〉では、可視光線及び赤外線による撮影を実施し、それによって得られた墨線の痕跡から線描図を作成する。これによって、当初の図像を解明し、外陣4面と内陣2面の連作としての表現と主題の統一性も明らかにする。また、『地蔵菩薩発心因縁十王経』、『正法念处経』、『往生要集』などの經典類との照合によって、本図に描かれた十王審判の場面の順序、地獄における刑罰の場面、仏・菩薩による救済の諸場面が描かれ、場面を区切るように雲が配されていることなどを明らかにする。

続く〈第三章 「十王地獄図」の欠損場面の線描による復元〉では、前章の墨線の抽出作業によっても判明し難い部分について考証する。内陣2面の保存状態のよい部分に注目して細部の表現までを読み取った上で、『地蔵十王経』や『観仏三昧海経』、『正法念处経』、『往生要集』等に述べられる十王地獄の記載と、聖衆来迎寺本「六道絵」、長岳寺本「大地獄図」など主題、画風の類似する作例を参考に、欠損部分はそれぞれに十王が対応する本地仏を補充し、痕跡がある場面の考証を行い、完全に見えない場面は同板絵の他の場面との関係性から失われた図像を想定して、6面の板絵の線描図を復元する。

〈第四章 「十王地獄図」の彩色の科学調査〉では、「十王地獄図」の色彩の特徴を考察する。彩色材料については、分析を通じて白色は胡粉及び鉛白、赤色は朱、橙色は鉛丹、黄色は黄土、茶色は弁柄、青色は群青、緑色は緑青、金色は金泥を使用していると確認できた。彩色表現については、王の衣、冥官の衣、机と椅子の布、獄卒などは、繰り返し描かれているモチーフであり、これらの彩色には色にバリエーションがある。また、地蔵菩薩の服飾には多彩な色と文様が観察された。罪人の肌は、男女を二色の肌色にしている可能性が考えられる。柱、屏風、雲など、色が決まっているように観察された部分は、内陣と同じように塗り、空、山、火焰、刀葉樹、大河、岩石、木材、植物など、重複して描かれていないモチーフは測定箇所から推定できた彩色を使用した。また、内陣では様々な細かな文様の描写が見られるため、復元では色々と文様を描き込んだ。

〈第五章 「十王地獄図」の復元制作〉では、復元できた墨線と彩色の科学調査の結果を踏まえて、まず想定復元CG図を制作した。内陣の図では様々な細かな文様の描写が見られるため、それも参考とした。その上で、原寸大の紙を用いて肉筆の復元模写の制作を行った。対象の質感表現に留意して墨線を施し、輪郭線に沿って均一に掘塗りをし細部を暈した。毛髪に金泥の線を引き、内陣に見える文様や関連作品を参考にして、十王と獄卒の衣紋、机と椅子の布などの文様を描き入れた。経年劣化により観察できない部分は文様の様式と疎密変化は人物関係と画面のバランスに注意して文様を作った。

以上の調査と考察、復元模写の制作を通して、障壁画としての本図の当初の造形を蘇らせた。本図は、描写内容、構図、技法、彩色材料等全てにおいて工夫が為されており、戦国乱世の不安定な状

況下、民衆に地獄への恐怖と浄土への願いを呼び起こす宗教的絵画空間として機能していたのである。

## 審査結果の要旨

本研究は、京都市上京区にある千本引接寺（通称、ゑんま堂 以下この呼称を使用）に所蔵される「十王地獄図」板絵6面（以下、本図と称する）を研究の中心対象に設定し、背後にある東アジアの十王信仰や六道思想とその造形の考察も踏まえた上で、光学調査・科学分析等の現地調査を実施することで保存状態、図様、表現技法等を解明し、関連作品及び文献資料の検討を通じて想定復元模写を制作することにより、その思想背景や宗教美術作品としての意義を明らかにすることを目的としている。

ゑんま堂には、かつて「十王地獄図」を描いた壁画があった。狩野元信筆と伝えられ、実際の筆者は不詳であるものの制作時期は室町～桃山時代（16世紀）と考えられている。内陣2面、外陣4面からなり、現存する地獄板絵としては最大規模の作例で、ながく地元での信仰にも供されてきたことから、美術的にも宗教・民俗的な観点からも注目すべき作品といえることができる。

しかし、現状では壁面に僅かに遺る墨線及び絵具の痕跡から確認し得る状況である。発表者はその復元模写制作を計画・完成させ、それと平行して「東アジアの十王信仰及び六道思想に関する図像研究」を執筆・提出した。

本論は五章で構成される。まず第一章では、仏教史と絵画史の観点から、かつて東アジアにおいて成立発展を遂げた地獄思想とその思想に基づいて制作された地獄絵について総覧する。第二章では、壁面の現状を確認。目視及び赤外線写真撮影によって墨線の痕跡を丹念に観察し、当初いかなる図像が描かれていたのかを明らかにする。それを踏まえて第三章では、各図像が仏教史上のいかなる経論に依拠し、絵画史上のどのような先行図像に基づくかを確認。併せて、画面において現状では明確に特定し難い場面に何が描かれていたのか教理史的・絵画史的観点から推定・復元をする。第四章では、蛍光X線分析を通じて当初用いられていた絵具の材質・色調を明らかにする。保存状態のよい2面の板絵の観察から、王および冥官の衣、獄卒の肉身、布がかけられた机・椅子の彩色などでは、様々な色相の彩色材料が使用されている一方、建築物の柱や屏風は同じ色に塗られていることを指摘している。また、衣や調度には細かな文様が観察されたことが述べられている。そして第五章では、こうした知見を総合して、李氏自身の手による壁画の復元模写作品の制作について論じ、6面の全てを原寸大の復元模写として完成させた。

本論の構成は明快で合理的であり、一つの作品が有する思想と歴史、材質と技法、宗教性と芸術性を幅広い視野から捉えている。

これらの計五章にわたる調査研究、復元模写の制作の結果、終章では、本図は描写内容、構図、技法、彩色等全てにおいて工夫が為されており、戦国乱世の不安定な状況下、民衆に地獄への恐怖と浄土への願いを呼び起こす宗教的絵画空間として機能していたと結論づける。

本論文に記されていた通り、発表者は、経年による劣化が進んでおり肉眼ではその図様を判別することは難しい作品をテーマに、詳細な観察を繰り返し行い得られる情報を基に、保存修復と文化財科学的な多角的アプローチを用い、経典類を参照して全体像を明らかにしている。損傷が激しい大きな地獄図と現場でしっかり対峙し、そこから感じ取れるインスピレーションを丁寧に拾い上げ、日本絵画表現と創意を加えて実物大6点の復元制作に取り組んだものであり評価できる。

審査員からは、制作の根拠が多岐にわたっている事により、復元作業を通じて、制作当初の作品とは異なるイメージを創出してしまうことが危惧されたとの指摘もあった。しかしながら、これは決して本論を否定するものではない。むしろ、本論の考察によってあらためて問題点が明確化したことに意義があり、それは肯定されるべきであるとの意見が出された。

本審査に合わせた作品発表では、復元模写6点をゑんま堂にある本図とほぼ同じ高さに壁掛けした高めの設置と照度を下げた会場作りに、宗教的で威圧的な気配を仕組んだ作者の意図が伺えるとともに、少し引いた状態で会場全体を眺めると、6点の白い雲の流れやコンポジションがリズムカルに響き合って効果的であった。失われた箇所所想定図様や衣服等の文様、画中画などの細部描写には作者の美意識を優先させた部分があるものの、実際に展示空間に設置した際に大画面の濃彩描写が生み出す絵画空間には、原本が持っていた宗教画としての視覚印象や教説内容を観者に訴えかける力強さを髣髴とさせるものがあつた。

また、鑑賞の手引きとして配付したパンフレットも、親しみやすい内容・イラストで構成されていた。実物大の復元制作を用いた鑑賞体験が、現代における文化財への理解と継承のための機会ともなることを示し、保存修復研究の成果を社会的に還元する観点からも意義深い展示であった。

発表者の研究はテーマの重要性とともに、困難な対象に挑戦する姿勢は、本研究の意義として十分評価され、これまで研究の進んでいなかった本図についての研究を今後進めて行く上での基礎を提供する点からも画期的な成果と位置づけられる。

現状では僅かに留められているのみの痕跡を、現時点において可能な限り調査を行い、思想と絵画の歴史のなかで位置付け、それを復元して後世に伝えることの意義が明らかとなった。

以上を踏まえて、本論、作品は博士学位の水準に十分に達しており、審査員全員一致で「合格」とであると認められた。